



有恒 yuko

2022 October vol.24



式典で司会を務めたTBSアナウンサー若林有子さん(商令元卒)＝「ざっくばらん」で紹介

「大阪公立大学」開学特集第4弾／対談企画
辰巳砂昌弘・大阪公立大学学長
岡本直之・大阪公立大学校友会会長

OB・OG紹介／俳優・監督・前田多美さん(文博平20修)

社長さん紹介／駒井ハルテック・中村貴任さん(商昭58卒)



ニューヨーク経験で培った "伝える"力を活かし TVメディアに羽ばたく新進気鋭アナウンサー

TBSアナウンサー 若林有子さん(商令元卒)

今回登場していただくのはTBSアナウンサーの若林有子さん。現在『ひるおび』のプレゼンター、BS-TBS『報道1930』のサブキャスター、『サンデージャポン』のレポーター、『Nスタ』や『JNNニュース』等を担当されています。小学校卒業後から高校2年までニューヨークで過ごし英語も堪能。大学在学中から『週刊朝日』の表紙を飾ったり、難関オーディションに合格したりするなど大活躍。大学生時代から、現在の仕事の話まで、ざっくばらんに語っていただきました。

■アナウンサーを目指すきっかけ

きっかけは2011年の東日本大震災でした。当時ニューヨークに住んでおり、震災の情報はネットニュースで知ったのですが、活字や写真を見ただけでは、どれくらい大きな地震なのかはわかりませんでした。学校から帰宅してたまたま点けた報道番組で、初めて津波の映像を見て、悲惨な被害状況にショックを受けました。文字だけでは伝わらないことを映像と声で伝えるTVニュースの威力を感じたそのときが、いちばんの契機となりました。

大学は、自宅通学できる国公立を親から勧められ、父親の出身大学でもあり、私が志望する商学部もある市大に進学しました。入学後、TV局でアルバイトを始め、そこで実際に番組制作の現場を見て、アナウンサーへの思いが強くなりました。仕事内容は、テロップの確認や、アシスタント・ディレクターのサポートなど、番組制作の末端の仕事で、その生の現場を見て想像以上に準備に時間がかかっていることを知りました。たった数分のニュースでも、放送時間の10倍も20倍もの準備時間をかけています。その膨大な時間をかけて取材・制作したものを、制作者の思いを乗せて視聴者に伝えるのがアナウンサーの重要な役割です。制作者と視聴者をつなぐ橋渡しとなるアナウンサーに憧れを抱いたのはこのときでした。

■入社してから知った大変さ

本番放送前の準備の多さ、大変さを改めて感じさせられました。例えば番組での10分のプレゼンのためには、オンエアの3~4時間前には入社して、資料を読んだり、スタ

ッフと打ち合わせをしたりします。5分間のVTRでも4~5時間はロケを行い、先方のリサーチの時間なども含めると半日くらいはかかります。視聴者が何百万人もいると思うと、たった数秒でも無駄にはできないので、より良い伝え方をひたすら模索します。自分の仕事にひたむきに取り組むような職人気質の方たちと一緒に仕事ができ、真面目な人が多いTBSは自分に向いており、入社前には知り得なかった居心地の良さを感じています。



正月番組「東西ドリームネタ合戦」の進行を担当して3年目

■ニューヨーク経験がアナウンサーに繋がっている

ニューヨーク(以下、NY)で過ごしたことで、それまでの自分にはなかった考え方に触れ、いろんな立場の人たちとの交流ができたことは大きな収穫でした。ディスカッション授業で、場の空気を読みながら相槌をうっていたら、「あなたはこう思っているの」と、自分の意見を求められたときのことや印象に残っています。NY生活で学んだのは、まずは自分の意見を相手に伝えることで信頼関係が築け、それ

が円滑なコミュニケーションに繋がるといことです。NYで恩師からいただいた「Be yourself」は、私の座右の銘として今でも大切にしています。

また、NYでの生活で"知る"の大切さも実感しました。中国人のクラスメイトから突然「日本人嫌いなんだよね」と差別的な言葉を向けられたことがありまし



NYの中学校の恩師Mr.Collinsと

た。その言葉に傷つきましたが、「なぜそんなことを言うんだろう」、「どういう歴史的背景や社会情勢から、そのようなヘイトが生まれるのだろう」と疑問を持ち、自分なりに調べてみました。決して共感はできなくても、どういう考えや気持ちが存在するのかを知ることで、視野が広がったり、自分の考えを深めたり、人生を豊かにすることができると感じました。誰かが何かを知るきっかけの一助になりたいという気持ちは、アナウンサーの仕事に繋がっているかもしれませんね。

渡米した当初は英語が話せず、自分の想いを伝えられないもどかしさを感じました。当時は、日本で青春を謳歌している友人たちが羨ましく、NYに住んでいること自体をコンプレックスに感じていましたが、帰国してから、NY経験がプラスになったなと思えるようになりました。

■大学時代の思い出

高校2年のときにNYから大阪に戻り、大学生になったら憧れだった課外活動を始めてみよう、テニスサークルに入り、とても濃密な時間を友人と過ごすことができました。今でも月に2、3回は学生時代の仲間と会っており、一緒に過ごす時間は仕事を忘れて1番自分らしくいられる貴重なひとときとなっています。

■休日の過ごし方

広く浅くいろいろなことに手を出しているのですが、中でも好きなものは漫画と音楽ですね。この二つは仕事で関わる映像の世界から離れられるので、頭を空っぽにすることができ気分転換となっています。

■母の姿をみて

尊敬しているという気恥ずかしいですが、私自身、母の考え方にいい影響受けました。私が幼い頃から、母は

いわゆるキャリアウーマンで、外で働くかっこいい姿が印象的で、ストイックに、やりがいを持って働く母の姿を見て、自分もこんなふうになりたいと思うようになりました。母はいつも真っすぐ私を見守りながら、的確なアドバイスをくれ、そのお陰で今の自分があると感謝しています。アナウンサーを目指しながらも、自分には向いていないのかなど悩んで泣いたときがあったのですが、母から「まだ泣くほど努力していないんじゃない。ちゃんと努力してから悩んだらいい」と言われたんです。泣いているんだから慰めてよと当時は思いましたが、(笑)でも母の言う通りなんですよね。このときの母の言葉があったからこそ、本気でアナウンサーを志望する自分の気持ちに向き合うことができました。1番のファンだと言ってくれる母からの言葉は、誉め言葉も厳しいアドバイスも、ありがたい限りです。(笑)

■今後の仕事の展望

具体的な展望があるわけではありませんが、漠然と「この人だからチャンネルを合わせよう」、「この人だから耳を傾けよう」と思ってもらえるようなアナウンサーになりたいですね。そのためには、自分には何が必要なのか模索中です。説得力なのか、知名度なのか、親近感なのか、答えはまだ出ていませんが、これからアナウンサーとしての実力を身につけられるように励むつもりです。

■今春、大阪公立大学開学式典で司会をされた若林さん。現役の学生に向けて

大学が統合されてOBOGの数が増えるので、そこで生まれた繋がりは大切にしてほしいですね。式典のときも新大学の規模の大きさにびっくりしました。市大のこじんまりしているところも好きだったので、その校風を大切な思い出として残しておきたいと思っています。

〈インタビューを終えて〉

TV画面から受ける印象同様に、澁刺ながら丁寧な語りのお陰で取材の雰囲気や和み、予定時間を大幅に上回っても快く対応していただきました。同時に、TVメディアでの仕事へのやりがいだけでなく、使命感までの熱情がひしひしと伝わってきました。ジェンダーギャップが問われる日本社会で、「女子アナ」若林さんの仕事へのひたむきさでいっそうの飛躍を期待。ますます応援したくなるインタビューとなりました。

インタビュー：奥山正昭(経昭44卒)

文責：加藤菜々子(経令2卒)